

使
命
感

これからの学校事務

私が学校事務職員として採用された昭和四十年代前半は、社会全体の時間が実にゆつくり流れていたように思います。学校も同じで、子どもたちも伸び伸びと学校生活を送っていました。

戦後日本の高度経済成長そして情報化は、ガリ版・謄写版・そろばんの時代から、コンピュータをはじめコピー機やファックスといったIT機器の発展普及へと、私たち学校事務職員の仕事を大きく変えてきました。

しかし、新しい事務機器が導入されたにもかかわらず、学校事務職員の仕事は、昔より時間的余裕も無くなり、質・量とも増加しているのが現実です。

中央教育審議会の答申や教育基本法・教育三法の改正により、学校の組織運営体制や指導体制についても変わりつつあります。

また、教職員の評価制度や学校評価の導入・公務員制度の改革と、教育界も大きく変わろうとしています。これらの改正等により、事務職員に求められているのは、教員の事務・業務の軽減化及び効率的・効果的な事務処理と学校経営への関わりではないでしょうか。学校裁量の拡大に伴う事務量・予算の執行等への関わりと対応、また、学校事務職員として、教育活動への支援と、校長を補佐し学校経営に関わりながら教育活動の推進にどれだけ貢献できるかが問われています。

事務職員が共同で複数の学校の事務を効果的・効率的に実施する、共同実施組織の全体的な導入と組織化により、事務処理体制の確立と強化が図られ、教育活動や学校経営を積極的に支援していくことが可能になると考えられます。

平成十九年三月に、「教員の事務負担を軽減するため、事務職員が学校運営に積極的に関わり、事務の共同実施の促進と組織の制度整備を行うなど、事務処理体制の充実を図っていくことが必要」と、中央教育審議会が答申しています。

しかし、まだIT機器を使った文書処理、会計処理、給与旅費の入力登録票の作成、定型文書のデータ化、パソコン事務処理ソフトの共有化など、今できるものから実施しているのが現状です。しかし、現在求められているのは、もう一歩踏み込んだ共同実施であると思います。それには、共同実施の単位となる地域へのバランスのとれた事務職員配置とともに、地域のリーダーへの権限と処遇等も考えていただかなければならないと感じています。

少子高齢化、情報化社会、多様な価値観の社会の中、私たちは、学校事務職員の職務を通じて、様々な教育支援を行うことにより、子どもたちの健やかな成長と保護者や地域住民のニーズに添えていかなければならないと思います。たとえば、学校事務職員として教育業務・学校行事等に積極的に関わり、教育予算の有効活用・重点配分等、教育支援を行うことなどが挙げられます。このことにより、仕事に対する責任と充実感とともに、学校経営の一端を担っていることが、さらに自覚できるようになると思います。

教育内容の理解・企画立案能力・説明責任能力・事務処理能力など事務職員としての職務遂行能力や、マネジメント能力の向上と、コミュニケーション能力を養うなど、自己研鑽に努め、校長の基本的考え、教育方針等を理解し、学校経営に貢献することが求められていると思います。

不易なものを追い求め続けて

本校の職員の靴箱の出入り口に「履物を揃えようと心も揃う／心が揃うと履物も揃う／脱ぐときに揃えておくと履くときに心が乱れない／誰かが乱しておいたら黙って揃えておいてあげよう／そうすればきつと世界中の人の心も揃うでしょう」という貼り紙が掲示されている。それを読むたびに、教育哲学者の森信三先生の教えを思い出す。森先生のしつけの三大原則は「①挨拶ができる②『はい』とはっきり返事ができる③履物を脱いだら必ず揃える」である。これらは全て「我をとらなければできない」と言う。①は、何事に対しても自分から意を決して挨拶する毎日の実践の積み重ねを通して、自主的・主体的な心の育成を願うものである。②は、「はい」と返事をしたとき心が素直になり、人の話が心に響く。即ち「私意を払って謙虚に聞く」心の育成を願うものである。③は、しまりのある子どもの育成を願うもので、これが一番難しく大人でもなかなかできないことである。だから、誰かが先程の貼り紙をしたのであろう。

「三つ心 六つ躰 九つ言葉 十二文 十五理」これは、三歳までに素直な心を、六歳になるとその振る舞いに節度をもたせ、九歳では人様の前でも恥ずかしくない言葉遣いを覚えさせ、十二歳ではきちんとした文章が書けるようにさせ、十五歳にもなると物の道理がわかるようにしなければならぬという教えであると聞いたことがある。この大事な躰や基本的な生活習慣を根付かせることは容易ではないが、その一つの方法として、「賛嘆」をすすめている。賛嘆とは、広辞苑によると「ふかく感心してほめること」とある。

人は誰でも「関心をもたれたい」「理解されたい」「認められたい」「信頼されたい」といったような欲求があるといわれる。このことは親や大人に頼っている子どもにとってはなおさらである。このような欲求を満たしてやるのが、子どものやる気を喚起し、何事にも根気強く取り組ませることにつながる。 「子どもの足りないところ、よくないところ」はすぐに目に付くが、「よいところ」は見つける努力をしなければなかなか見えない。漠然と見ているは悪いところしか目に入らず、「注意する言葉」「叱る言葉」しか出てこないことになる。見つける努力をして、よい面が見つかると気持ちも和らぎ、深く共感した心からの「ほめる・励ます豊かな言葉」が出てくることもある。子どもは認められ、ほめられ、励まされて、満足感を味わい責任感が養われ、一層やる気を起こすようになる。ほめられた方向に子どもは育っていくといわれるように、「できないことを叱るよりも、できたことをほめよ」が子育ての原点ではないかと、改めて再認識している昨今である。

これまで、学校で子どもたちと元気な挨拶を交わすたびに、できるだけ賛嘆の握手をするように心がけている。握手した子どものこの手が、やがて世界を動かす手となるわけである。また、子どもは一冊の本であるといわれている。どんな本よりも読みごたえのある本である。だから、直に子どもという本から何か大切なものを読み取り、不易なものをその本に書き込んでいかねばならない。環境が人をつくるといわれるように、教師は学校において子どもにとって最も身近な人的環境である。子どもは大人の鏡である。子どもは大人の言うようには育たず、子どもの言動が次第に担任の言動に似てくることから、大人のしているように育っていくものである。まさしく教育は人なりである。今、「自立と共生ができる子ども」を目指して、教育目標の具現化に取り組んでいる最中である。

「教育は国家百年の計」と言われてきた。人づくりは「まず教育から」と、国家は、長期的スタンスに立って、教育（＝学校）の有り様を探ってきた。しかし、いつの頃からか、守られてきた学校にも、新たな教育理念が、次々と導入されるようになった。今、振り返ってみると、「あの時」が、変わり目だったのかなと思う出来事がある。

それは、教師として充実期を迎えていた四十代半ばの、一九九二年九月のことであった。学校でもこんなことが起こるのか！と、その時の思いは、今でも鮮明に覚えている。月一回ではあったが、年度途中から「学校週五日制」が実施されるようになったのである。「学校の制度が変わる」このようなことは、当時の私にとって、想像することもできなかったことである。

それ以来、少子化に連動するかのように、学校も、これまで馴染まなかった「変化」の波にさらされるようになってきた。「学校週五日制」が完全実施となった二〇〇二年には、生活科をベースとした「総合的な学習の時間」が創設された。その後も、「学校評議員制度」「学校評価」「教職員評価制度」などが導入され、「説明責任」という考え方も入ってきた。最近では、子どもの「安全確保」という視点からの学校経営が重要になってきている。

こうした、さまざまな「変化」を通して感じたことは、これからの学校は、従来の手法を超えた「知恵」の集積が必要になってきているということである。また、教師に求められる資質としては、「教師だから許す」ではなく「教師だから許さない」という視線を受け止めながら、「変化」を逆手に取るようなたくましさや身を付けていくことではないかと思う。

しかし一方では、どんな時代になろうとも、子どもの前に立つ教師である限り、持ち続けなければならない「不易」な領域があることも確かなことである。「それは何か？」と問われたなら、最終的には、「子ども理解」に行き着いてしまう。

学校とは、子ども一人一人が、生涯にわたって学び続けるための「力」を身に付けていく所である。そこで、直接子どもと向き合う教師には、子どもを見るさまざまな視点が必要になってくる。なぜなら、学校には、子どもが伸びるチャンスがたくさんあるからである。もし教師が、それらを見逃してしまったとしたら、子どもの伸びる芽は摘まれてしまうことになる。だから、教師は子どもを見るさまざまな視点を備えていなければならないのである。

大人である教師も、子ども時代を経てきているわけだが、いつの間にか、「子どもの心」を見失っていく傾向がある。昆虫を追い求め野山を駆けめぐったことや、時間を忘れ、本の世界に没頭したことなど、子ども時代の「震えるような感動」が思い起こせなくなったとき、真の「子ども理解」は難しくなってくるのではないだろうか。「大人げない」と言われても、教師としての資質は、いつまでも「子どもの心」を持ち続けることであり、その努力を怠ってはいけないのである。

最後に、この仕事を通して、これまでに数千人という子どもたちに接してきたことになる。なぜ、こんなに多くの子どもたちと関わる事ができたのか……それは、月並みだが、子どもが好きだったからに他ならない。

生涯一教師

初任校の教頭先生に、その当時の流行語「金の卵」と言われて、昭和四十五年四月に新米教師となって、いよいよ三十八年目になりました。

まず、教職員十三名の一員になって、教師の仕事が多種多様にわたっていることを知り、驚きました。今のように各種の加配教員の配置もなく、新採の私は自分の仕事に追われ、放課後、学年主任が子どもに勉強を教えている傍らで、学習指導や生活指導、学級事務について指導を受けました。また、宿直の夜、先輩から若い頃の苦労話や誇りを持って勤務する心構えを聴いて、改めて教師の仕事の意義あることを学びました。

さて、教師の本分である教科指導では、学習指導要領を隔々まで読んで、下線を引き、大事なところはノートに写し取ったことも今では懐かしく思います。特に、子どもたちの個人差の大きい算数科の授業は、豆テストやワークシートを作ったり、自作教具を作ったりして基礎基本の定着を図ることに努めました。その当時は、市販の問題や教材・教具も少なく、自分で何とかしなくてはなりません。そこで、週に一度の宿直は、問題作りや自作教具作り、日々の授業の略案作り等を行う貴重な時間でした。新採の私にとって大変ありがたい時間で、先輩の分まで宿直をさせてもらいました。

その後、中学校に異動しました。校内の研究授業後、ある先輩から中学校教師は、「教科指導だけはダメ、部活指導だけでもダメ。」と言われ、『文武両道』を目指すが教師本来の姿である。」と思いました。まだその当時は、心のすさんだ生徒が各クラスにいましたので、生徒指導がきちんとできないと学習指導にも影響しました。

だから、教師と生徒の人間関係を円滑にし、生徒個々の能力差を把握した授業を展開するために指導方法の研究は必須でした。時代の要求を踏まえて行われる学習指導要領の改訂は、自身の指導のマンネリ化を反省させ、新たな気持ちで、授業づくりに取り組ませてくれました。また、強い心づくり、堅い仲間づくり、技術の習得の三本柱を部活動の指導方針と定めて、生徒の個性を認め、伸ばすために全力投球しました。この部活動では、生徒と真正面向き合い、生徒のよさを確認し、教科指導や生活指導に生かすための大切な教育活動であると確信していました。卒業後、教え子の結婚式に招かれ、当時の教え子と会い、厳しかった練習や大会の思い出を話しながら、教え子の成長を見て、教師であることを誇りに思い、教師冥利に尽きると強く感じ幸せに思いました。私の指導方針を信頼して、我が子だけでなく、部員一人一人を支えてくれた保護者の皆さんの協力は、選手たちにもやる気を起こさせ、部活動を運営する上で大きな力になったことを今でも感謝しています。

現在、大きな教育改革となった「学校週五日制」のゆとりの中で、「生きる力」を育む教育に対して課題はたくさんありますが、児童生徒が真剣に将来を考え、夢に向かって生きていくために、今、学校教育に求められることは、教師自身が時代の流れを柔軟に受け止め、指導力を高めることだと思います。

後輩の皆さんには、いつの時代でも教師の在り方として、「文武両道」を追求し、教師自身も豊かな心をもつ「生涯一教師」を目指して、不易と流行を見極め、児童生徒を中心に据えた学校教育を支えてほしいと思います。

心の交流　↳内面理解を重視して

「学校は、学級経営が基盤である」と、子どもの目線にあった学級経営の重要性を先輩から教えていただいた。子どもは誰でも、認められたい、充実感を味わいたい、よい結果を得たいと願わないわけではない。学級経営は、教科指導・児童指導と多岐にわたり、その時、その場で意図的・計画的に働きかけなければならない。

休み時間になると、担任の机のまわりに子どもたちが集まってくる。若い時にはなおさらである。しかも、授業中とは別の顔である。先生と話したい、先生に話したい。いわゆる「先生、あのね。」である。そして会話が弾み、子どもの心の一端を見るチャンスとして大切なことである。自分の自慢や困ったこと、友達のこと、家のできごとなど、コミュニケーションが図れると共に貴重な情報源であった。何も話せない子どもからも目を離せない。子どもは一人一人いろいろな環境で育っている。特に、最近はその変化と共に複雑である。

このような中で学習指導。「知識・理解」「技能」などの目標をもって指導にあたる。しかし、子どもたちの態度や姿勢は、その時々によって心理的・体力的に違いが出る。教科目標の達成を通して満足感を味わわせるには、子ども一人一人にあった働きかけが欠かせない。「先生、あのね。」から得た情報を考えつつ、励ましたり指名したりして指導に当たることが大切で、教科目標と同時に心の安定を図る目標が必要である。（超教科目標）

子どもの内面を理解し、指導内容が「分かる」「できる」「さらに」「やったあ」、その上「おもしろいなあ」という気持ち味わわせることが重要である。

また、楽しく意欲的な学校生活へ向けて、子どもの長所を伸ばし、自信を持たせるよう働きかけを継続してきた。日記指導による励まし、運動能力面の伸長、理科研究への意欲の喚起、絵画や書道の能力開発などの支援をしてきた。

長い教師生活では、勤務校や年齢・地域性などによって立場が変わってくる。いずれにしても組織の一員には変わりはない。担任として、教科主任として、涉外担当として、何をどうするか迷う時もあった。そんな時、先輩や同僚からのアドバイスや励ましは、解決と共に自信を持つことにつながった。組織力は個の力量を大きくするものと実感している。

教職員の現状は、という忙しい。仕事はパソコンがないとはじまらない。教職員同士の「言葉のふれあい」が少なくなりつつある昨今、教育現場だけは、人と人とのかわりを増幅させていきたいと願っている。私たちは、教育に関する専門家である。一個人としての自分を磨き、社会人としても教師としても幅広い人格形成に努めたい。「教師の常識、社会の非常識」にならないように。

教師は、時間を超えて子どもへの影響が大である。担任の時は、その子どもへの思いを「贈る言葉」として、校長である今は、「路傍の石」の名言を揮毫して贈っている。家に掲げたと聞いた時は何となく嬉しい。すでに、受け持った子どもは実社会で活躍している。欧州の環境先進国で環境情報センター代表として活躍している教え子は、小学生時代に「外国で活躍したい」と語っていた夢を実現した一人である。小中学生時代に将来の夢を持たせる意義は大きい。

二十一世紀を担う子どもたちに、「本気で、元気に、根気強く」そして「やる気と勇気」をもち「活気ある」子どもに、学校に、と啓発しているところである。

進路選択力

県立高校合格発表日。ある進学校を受験した、学級の男子生徒が不合格となった。担任としては、予想もしない結果に戸惑いながら、家庭訪問をした。母親からは「朝、慌てる様子もなく、合格発表を見に出かけることもなかった。」とのこと。母親は、不合格に加え、子どもの態度から「どうということなの……。」と、涙ながらに不信感を募らせていた。担任としては、母親に納得のいく説明が出来ないことに情けなさを感じ、「申し訳ありません。」と謝りながら、母親と同じような気持ちになっていた。

日ごろの学習や学校生活での取り組みに何ら不自然さもなく、友達と共に課題等に取り組み姿も見られた。担任としては、このまま目標とする高校を目指して、学習に取り組んでほしいと強い期待感を持って見つめていた。

彼は、母親の前で何も答えてくれない。しばらくして外で、話を聞くことにした。なかなか要領よく話が進まない。沈黙の時が流れた。「担任としては、不合格になったことが信じられない。」「何かあったのか。」と尋ねた。彼は、「好きな教科の勉強がしたい。」とポツリと言った。主に数学を中心とする教科であることは、推察できた。確かに上級学校の教科書の学習内容に興味を示しながら、自習する姿が思い浮かべられた。

彼は、興味のある教科への学習意欲が高く、その意志を貫こうとし、周囲に迷惑をかけないように授業や受験学習への取り組みをしてきたことも分かった。受験した入試科目の得点を調整しながら、自ら不合格になったのである。級友が何の疑問も抱かず進む高校生活に興味を持

てなかったのかもしれない。

大検を経て大学を卒業、仕事に就いた彼と会う機会があったとき、「部下職員とコミュニケーションをとることが苦手で、困っています。」と漏らしたことがある。

自ら拒否した高校生活は、そのような彼の苦手とするところを補ってくれる機会や、人との交流、様々な体験を通して、多くのことが学べる期間ではなかったかと密かに思った。

今も彼とは年賀状などのやり取りが続いている。最近結婚の報告があり、さっそくお祝いの言葉を送った。いつの日か、彼とまた会える機会も来るかもしれないが、彼の進路選択について触れるつもりはない。

彼は、自らの意志を貫き決断、進路を決めた。その意志の強さ、実行力は認めながらも、真の進路選択力と言えるかは疑問である。担任としては、彼が進路選択までに悩み抜いたと思われる時期に、内面に触れる関わりが持てなかったことを悔やんでいる。

中学校卒業後の進路選択、生き方は、生徒にとって大きな問題である。どの生徒も必ず個々の悩みを抱えていることを認識し、具体的に、継続的な関わりを持ち、考えや思いをよりよく理解してあげることがいかに大切であるかを教えられた思いでいる。

生徒一人一人が自らの生き方を考え、希望を持って、進路を選択、決定できる力を培っていくことが中学時代の大きな目標であり、それを支え、育てていくことが、担任・教師の役割、使命でもあると考えている。

新たなことに挑戦を

もう二十年ぐらい前になるでしょうか。ある先輩が「仕事は椅子がする」と言ってお司から叱られたことを思い出します。先輩は「校長、教頭、指導主事など、その立場になれば、そのポストに座っている人が言ったというだけで皆さんが動いてくれる」という意味で話されたのでしょうか。しかし上司は、「仕事というものは、その人がしつかりとした考えと熱意を持ってやらなければできないもの」と言いたかったのです。このことを聞いて、自分の考えをしつかり持って学校経営にあたることの大切さを学びました。

その後、実際に学校経営を任される立場になって心がけたことは、自分の考えを持って新たなことに積極的に取り組んでみることでした。

その一つとして、国際交流を中心とした国際理解教育に取り組んだことがあります。これからの社会では、世界の人たちと仲良く生きていくことが必要なこと、日本と世界がどのようなつながりや関係を持っているのか、ということを知りたいと思ったからです。

一年生は、東京に行って、日本語学校に学んでいる各国の学生と一緒に、見学などをして交流しました。二年生は、宿泊で東京に行きました。初日の午前は国際協力機構、日本ユニセフ協会、国際連合（広報センター）、日本貿易振興会、日本外国特派員協会などに行き、日本が世界の中でどのような役割を果たそうとしているのか学びました。午後は日本にあるオーストラリア、スペイン、ブラジル、スウェーデン、サウジアラビア、韓国など各国の大使館に行き、日本との貿易の状況や文化交流の様子などを学びました。二日目は、日本語学校へ行って一緒に授業を受けたり、日本の遊びを教えたりして交流しました。また、都内の名所を、互いの国

のことを話しながら一緒に見学しました。三年生は、京都での修学旅行で、大学の留学生や日本語学校の学生と丸一日行動を共にして、英語を使いながら交流しました。学生たちの国の料理と一緒に作り、一緒に食べながら交流したこともあります。

日本語学校や留学生との交流ばかりでなく、アメリカンスクールの中学生との交流も検討しました。交渉がうまくいきそうなことが何度かありましたが、社会情勢等の理由で実現できず国際交流の難しさを感じました。

この行事を通して学んだことは、新しい事業を立ち上げる場合とてつもないエネルギーが必要であったこと、少しくらいの困難に挫けてはいけないこと、いろいろな障害を乗り越えて実践できた時に大きな自信が持てるようになったこと、未知の知識や体験を習得する喜びを味わえたこと、外国の人たちが身近に感じられるようになったことなどが挙げられます。

この他に、耐性を育てるための全校強歩大会、生き方を学ぶための父ちゃん教室、日曜日での保護者参観、自己教育を育てるためのゼロトレランスなど、新たなことに勇氣を持って挑戦し、学校の活性化を図ろうと努めました。

最後になりましたが、私が学校経営をする上で心がけていたことは、次の四点でした。「一、誠実な姿勢で人に接すること。二、率先垂範の教育を実践すること。三、先を見通した教育を実践すること。四、勇氣を持って積極的に改善すること。」です。これらは人に言い聞かせながら、自分を奮い立たせていたことでもあります。

養護教諭として勤務する中で

養護教諭として小中学校に勤務し、もうすぐ定年を迎えようとしています。

初任当時は、養護教諭が全校には配置されていなかったため、知名度は低く、いちいち「養護教諭とは……」と説明しなければなりませんでした。

配置されても一校に一人でしたので、校長先生をはじめ諸先生、養護教諭仲間、医療関係者、行政関係者等多方面の方々からご指導やご支援をいただき、勤務してまいりました。

日ごる勤務する中で、モットーとしてきたことの一つ目は、「開かれた保健室」です。特定の人だけの保健室ではなく、だれもが、いつでも利用できる保健センターとしての保健室です。保健室にはいろいろな生徒がやってきます。そこには、時代背景があり、もろもろの家庭環境があり、多種多様の価値観が存在します。親や先生に言えないようなことを話していく生徒や「あのときのアドバイスはよかったよ。」などと、卒業時に言い残していく生徒に、思春期の生徒の教育の難しさ、生徒と本気で向き合うことの大切さ、厳しさと優しさの必要性を教えられました。よく生徒から「保健室に来ると落ち着く。」という言葉が耳にします。何かを求めて来たときに、教室とは違った雰囲気、心身の症状を訴えやすく、養護教諭がいつでも対応してくれるという安心感のある保健室、その特性がそうさせるのかもしれない。

二つ目は、「救急処置を優先に」です。救急処置は命にかかわってくるため、失敗は許されません。迅速かつ適確な判断や処置が要求されますので、今でも難しく、反省させられます。また、たとえ小さなけがであっても、大きな問題となり、思わぬ方向へと展開することもあります。時には、救急処置をするときの心得を実体験から学ぶこともあります。ある難病の児童

が保健室に来て、けがの手当をしたのですが、中学生に成長したその生徒に再会した折、あのとき、何かは分らなかったけれど、先生がひどく心配していたことを覚えているとのことでした。その児童は小一か小二でしたが、いろいろ感じ取っていたことに驚かされました。

三つ目は、「生徒一人一人を知る」を心がけました。全校児童生徒数が千人以上にもなると、顔と名前が一致しないことが多いのですが、知らないでは済まされたいと思いました。毎日の欠席、来室状況、健康診断、保健調査からの情報は不可欠です。救急処置のため、途中退席しなければならぬことが多いのですが、共遊の時間、学校行事、集会、登下校指導等にはできるだけ参加し、児童生徒とふれあう場を多くとるようにしました。宿泊行事は児童生徒理解の格好の場となります。以前は名札が常時ついていたので、名前を覚えやすかったのですが、最近では取り外さなければならぬ時代になり、とても残念です。

国際化、情報化が進む中で、子供たちを取り巻く生活環境、社会環境は著しく変化しています。そして、子供たちの抱える心身の健康問題（不登校、いじめ、喫煙、飲酒、薬物乱用、虐待、性の逸脱行動、生活習慣の乱れ、アレルギー疾患、感染症等）は深刻化し、養護教諭の職務の重大さを認識している今日この頃です。

今までに出会った多くの子供たちとふれあい、寄り添いながら、私自身も多くの学び、共に成長することができました。残り少ない在職期間を、児童生徒、職員の子身の健康の保持増進のために、微力ながら努めていきたいと思えます。